地域社会の異文化交流拡充を目的とした、視聴覚メディアの活用と情報発信に関する研究

―玉村町国際交流協会の地域日本語教室での実践例―

竹　上　瑞　穂

I. 研究背景及び目的

1. 研究概要

地域に在住する外国人に向けた支援環境である「地域日本語教室」には、①外国人在住者への語学習得支援、②外国人・日本人在住者同士の異文化相互理解環境、③地域社会に向けた多文化共生の拠点としての役割が米勢（2006）をはじめとして、これまでの研究で揺るぎないものとなっている。

しかし、その活動の実情は外国人在住者へ向けた一方向的な日本語教授の場となっているケースが大半を占め、地域日本語教室の本来の役割とは程遠い現実が地域社会の国際化には存在している。

専門家や、専門機関の不足、ボランティアへの役割過多、積み上げ方式による学校型日本語教育の弊害など、その要因は複雑であり、また解決策も容易に論じられるほど単純ではない。しかし、近年それまでの積み上げ方式の日本語教育手法から、コミュニケーション主体の会話から始める日本語習得に教育方法をシフトする動きが研究などに見受けられるようになり（米勢 2016）、この手法が異文化相互理解の活動につながる可能性を含んでいる。

だが、今日までの地域の国際化や、地域日本語教室を取り巻く研究では、教室運営やボランティアに対する教育、外国人参加者に対する支援手法に関する内容が充実している一方で、地域に在住する一般人、とりわけ日本人在住者に向けた異文化相互理解、多文化共生の拡充対策などの研究はそれほど多くない。そもそも、地域の国際化を考察した際の切り口はどれも、「交流のテーブルに着いた後の心構えや活動の仕方」に重点が置かれ、いかにしてごく普通の一般人を「交流のテーブルに着いてもらえるようにするか」という点に主眼を置いた活動、研究双方ともに不足している感は否めない。地域日本語教室を地域社会における異文化交流・多文化共生の発信拠点とし、将来的に地域社会の国際化を見据えるのであれば、避けては通れない未来への課題と考える。

本研究は、地域社会における異文化相互理解・多文化共生を地域全体に拡充するための礎となる具体的方法論を検討・議論し、実践的に検証活動を行って、有効策を見出そうとするものである。具体的には、地域日本語教室の活動において教室の外に向けた異文化相互理解発信の場であるスピーチ大会に着目し、スピーチ発表を、視聴覚メディアを使用して支援し、内容の充実化と理解しやすさの向上を図る。更に近年高性能化の著しいスマートフォンやタブレット PC を活用することで、地域日本語教室の内側で留まっていると考える異文化相互理解の状況を、外側である地域社会へ発信し、地域社会へ異文化相互理解を拡充する一提案を研究として実践した。

本稿では、1 章で地域日本語教室の現状に触れながら本研究の主旨を述べ、2 章で着目するスピーチ大会に関する先行研究を概観する。3 章では視聴覚メディアを用いたスピーチ大会の実践活動の流れを記し、4 章では撮影し編集した映像の効果をアンケートより考察する。5 章において一連の活動の成果と課題のまとめを行い、課題を踏まえて今後の研究活動を議論、検

討するものである。

2. 地域日本語教室と異文化交流の現状

外国人在住者の日本語習得の必要性は、日本人在住者、外国人在住者双方が最も重要ととらえている。留学生などの語学習得を目的とした訪日者は、訪日以前に日本語学習を受けているが、留学とは違った労働者や一在住者に用意されている日本語学習の環境は多くはない。

地域社会における外国人在住者に対し、生活や日本語習得の支援を行う団体の一つに「国際交流協会」がある。国際交流協会は地域に暮らす外国人在住者と日本人在住者の交流のために設立された組織であり、以前に比べ、研究においても社会的にも注目されるようになった。特に日本語習得支援活動としては、協会が主催する「地域日本語教室」があり、比較的安価で、夜間や休日に開講されていることが多いため、労働者や平日に時間が取れない人々が参加しやすい学習環境となっている。また、日本人ボランティアや地域在住者との交流も行われることから、地域日本語教室は各地域における外国人在住者と日本人在住者との交流の居場所や多文化共生の拠点とされている。

しかしながら、地域日本語教室の活動実態は外国人在住者に日本語を指導する「学校型日本語教育」が中心であり、専門性の高くない日本人ボランティアが主体となり、「教える―学ぶ」の関係性が構築された非対称な状況がある（池上 2007p108, 米勢 2010p.62）。この指導方法は週一回程の頻度で開催される地域日本語教室には適しているとは言えず、近年のコミュニケーション重視の教授法からも決して良い手法とは言えない（米勢 2011pp.50）。

だがこのような現状の要因には、地域日本語教室で語学教育の専門家からの指導が受けられず、ボランティアが担わざるを得ない背景がある。池上（2007）は、行政が主体的に果たすべき支援活動を地域のボランティアが肩代わりすることで、行政の対応の遅れを招いているという矛盾を「ねじれ」と称して、専門家の役割をもボランティアが担っている状況について、以下のように言及している。「外国人在住者が日本での健全な生活を維持し発展させるための保障は、行政が主体となって行うべきものと考えられるが、支援体制や行政の対応の不備を指摘しても、外国人在住者が直面している問題をすぐには解消できない。現実的には、地域住民がそれぞれに出来ることを自発的に行う形で支援せざるを得ない状況が続いている。この地域住民の支援行為は、行政が主体的に果たすべき支援活動を肩代わりすることになり、そのことが行政の支援体制の不備や対応の遅れを招いているという矛盾へとつながっている。このねじれの現状を是正すべく、公的支援体制の充実が望まれる。」

米勢（2006）もボランティアに対する役割過多として、結果的に教室の活動目的の対にあたる異文化相互理解や多文化共生を目的とした交流活動である「社会型日本語教育」の形骸化について論じている。加えて、「あくまで特定の外国人在住者と特定の日本人同士が交流している場であり、教室という限定的空間内だけの多文化共生に留まり、地域全体への反映、浸透は芳しくはない。」と論じている。

まとめると、地域日本語教室の現状はボランティアが日本語教育、異文化交流、情報発信拠点の活動を担わなければならない状況であり、重点的に行われているのは、学校型日本語教育である日本語の習得支援である。そのため、本来ボランティアが中心となって行うべきもう一つの柱である社会型日本語教育はほとんど機能していない。地域社会へ向けた多文化共生の情報発信についても芳しくなく、これまでに論じられている地域日本語教育、教室の理想像とされる姿は文字通りの「理想」でしかない。

3. 異文化交流の拡充に向けた一提案

米勢（2010）は、文化庁が2007年度から実施した日本語教育事業の「生活者としての外国人」を挙げ、「増加する定住外国人が地域社会の中で孤立することなく生活していくために必要な日本語能力を習得し、多文化共生社会の基盤づくりに資する」と述べている。この「必要な日本語能力」とはすなわち日本人とのコミュニケーション能力であり、つまり、日本人住民側に外国人とのコミュニケーション能力が育っていなければ機能しないと言及し、地域日本語教育は外国人在住者と日本人在住者双方に必要であると述べている（米勢 2010pp.61）。すなわち同じ地域に属する「すべての在住者」に対して地域日本語教育は行われなければならず、先述のように日本人在住者に対しての提供が圧倒的に不足している現状は早急に対策を行う必要性がある。そのためにも日本人在住者に向けた意識改革を促すための情報発信が求められる。

「外国人は怖い」といった発言を未だに耳にすることは多い。現代においても外国人との直接的な関わりを持たない生活を過ごす日本人にとって少なからずある感情ではないだろうか。イギリスやフランスやアメリカの町中のように、服装や体格、肌の色、髪の毛の質が異なる人々がなんら違和感を抱くことなく日常を過ごす社会とは異なるのが日本の実情であり、外国人在住者との距離を縮められない一つの要因であると考えられる。日本で労働に従事する外国人在住者は会社の寮とするアパートなどで集住しているケースが多く、母国語で会話し、仲間と行動を共にする。外国人の集団は未だに異様に見受けられ、同郷の者が集まるとついそこが日本であることを忘れ、母国での生活と同様の行動を行う。そのことで、日本文化と母国文化の差が強く顕在化し、日本人在住者が外国人在住者に対して更なる嫌悪感や恐怖感を持つ、負の連鎖となる。

①外国人在住者が現在の日本語力でスピーチ
・写真、図などで発表内容理解のための支援
・外国人のスピーチを日本人スタッフが支援

⇊

②外国人在住者について日本人の理解の促進
・より多くの近隣日本人の参加を促す
・同年代として近隣大学生の参加を依頼

⇊

③外国人在住者と日本人在住者との交流が向上
・外国人と日本人の交流の場の設定活動
・外国人日本人相互の挨拶や声かけ運動

⇊

④交流により外国人に対する意識の向上
・地域日本語教室で、さらに日本語力向上
・日本語教室と共に日本語スピーチの会開催

図1　異文化交流促進に関する一提案のフロー

米勢はこのような日本人在住者の意識変革を促すには、個人として知り合う場が必要であり、自治会活動や日本語教室が相互理解の場として機能することが望まれる、と述べ、日本人の意識変革が外国人在住者を地域社会での孤立から脱却させ、地域社会の多文化共生社会化に資するとしている（米勢 2010pp.50-51）。

しかし、実情として地域日本語教室の相互理解の場としての役割は機能しておらず、他方では、日本語会話力の低い外国人在住者が、すでに多数日本で生活している。このような状況を踏まえ、日本における生活支援、異文化相互理解、多文化共生を目的として、外国人在住者のすでに備わっている日本語能力と日本人在住者への異文化情報発信を活用した地域社会でのコミュニケーション活動を並行して実施することを提案する。

この提案の有効性を検証するために、群馬県佐波郡玉村町で「外国人在住者による日本語でのスピーチの会」の開催を企画した。図１に、異文化交流促進に関する一提案のフローを示している。この図は、上に述べた一提案について、その活動の流れを示すとともに、期待される成果と開催に必要と考えられる活動を示したものである。

「①外国人在住者が現在の日本語力でスピーチ」では、外国人在住者の日本語スピーチ（自己紹介など）において聴講者に内容を理解してもらうことを第一とし、事前に十分に練習や打合せを行い、当日はボランティアスタッフがスピーチをサポートするとともに、プロジェクターなどを活用し写真や図を投影して、不十分な日本語力であっても意思表明が成立することを理解してもらえるよう努める。

「②外国人在住者について日本人の理解の促進」では、開催に際して日頃より地域日本語教室の活動に参加をしている群馬県立女子大学の大学生に開催支援を依頼し、地域在住の日本人には広報活動を行い、出席参加を促すことで地域一体でのスピーチの会となるように企画する。開催場所である群馬県佐波郡玉村町には会場の手配を依頼する。また、スピーチする外国人発表者が勤務している法人に外国人従業員の出席承認を依頼する。

「③外国人在住者と日本人在住者との交流が向上」では、スピーチの会に参加した地域在住の日本人が外国人在住者のスピーチを聞くことで、まず、かれらの日本語力の実態を知ってもらう。また、自己紹介を聞くことで、日本で働くようになった経緯や日本での生活の実情などを知ることができる。さらに、不自由な会話力での日本の生活で困っていることなどを外国人在住者の口から直接聞くことで、支援の手を差し伸べてもらいやすくなると考えられる。町内などで出会った際に、地域の日本人在住者が声をかけることで、以降のコミュニケーションが成立すると考えられる。声をかけた日本人在住者には外国人在住者の日本語力はある程度わかっているし、かれらが日本で働くようになったいきさつも、現在どんな会社でどんな仕事をしているかも知っているわけであるから、日本人在住者からの積極的な声かけさえあれば、会話の発生が期待できると判断される。

「④交流により外国人に対する意識の向上」では、外国人在住者の日本語力や日本で働く実情を知ったことにより、日本人在住者の外国人在住者に対する意識改革を期待するものである。しかしながら、スピーチの会を開催しただけでは地域への浸透は限界があると思われる。このことから、スピーチの会以外の情報発信の手法を検討する必要があると判断される。このため、単にスピーチの会を開催するだけでなく、その時の様子をビデオカメラで撮影しておき、後に、情報発信として活用できるように、スピーチの映像情報ファイルの編集制作を行う。

映像情報ファイルの制作においては、外国人発表者の日本語スピーチにおける発話内容を日本語の字幕で示すものとする。制作した映像情報ファイルは、玉村町で上映会を開催する予定であり、その際に外国人在住者、日本人在住者にも参加してもらいコミュニケーションを深めてもらう予定である。なお、スピーチした外国人発表者に配布の許可が得られた映像情報ファイルは、玉村町国際交流協会を通じて外国人在住者、日本人在住者双方に配布し、スマートフォンなどで視聴してもらう予定である。これにより、参加できなかった、あるいはスピーチしなかった双方在住者に情報発信が可能となる。スピーチの会について知らなかった双方在住者には次回以降のスピーチの会への参加が期待でき、発表しなかった外国人在住者に対して発表につながる可能性がある。また、双方在住者に対して地域日本語教室に足を運んでもらうきっかけとなる可能性も大いに考えられ、地域社会の多文化共生の拡充が一層期待される。

II.　スピーチによる異文化相互理解

1.　スピーチ大会に関する研究の概観

地域日本語教室におけるスピーチ大会は多くの国際交流協会が行っているイベントでもあ

り、地域社会に向けた異文化交流、多文化共生のための情報発信の最たるものである。しかし、金久保（2016）が言及しているように、そもそも日本語スピーチコンテストを対象にした研究は多くはない（金久保 2016p.14）。

黒崎（2014）は、スピーチの評価を日本人ではなく、外国人日本語学習者（ベトナム人）が行った場合、どのような点を重視して評価を行うのかの研究を行った。

高村（2014）は、初級日本語学習者を対象にポーズ (Pause) 指導の効果についての検証を行い、日本語学習者に日本語母語話者がポーズを挿入する位置と同様の位置に同等の長さのポーズを挿入させることで、聴取者に聞き取りやすいと評価されるかを論じた。

金久保（2016）は、国内外で行われる多種多様な日本語スピーチコンテストを分析し、日本語学習者にとって実力試しの機会であるスピーチコンテストの実態を検討しながら、スピーチコンテストの意義や役割を考察している。さらに金久保は、国内における日本語スピーチコンテストの目的とテーマについて言及しており、その中で地方自治体の茨城県国際交流協会と鹿児島県国際交流協会が主催するスピーチコンテストの目的とテーマを列挙している。茨城県国際交流協会では「県内で生活している外国人の皆さんが日頃考えていることや、日本・茨城の印象、母国の話など、県民と相互理解を深めるテーマを日本語で発表し、異文化交流を促進するもの」としており、鹿児島県国際交流協会では「鹿児島県在住の外国の方に、日本語で意見を発表する機会を提供することで、外国の方の日本語能力の向上を図るとともに、鹿児島の国際化を考える上で、国籍や文化の違いを越えた相互理解・国際交流を深め、多文化共生の社会づくりを目的とする。」としている（金久保 2016p.18 下線は筆者）。上記の２つの国際交流協会の目的からは、相互理解や異文化交流、多文化共生をスピーチコンテストによって社会に促していこうとする姿勢が見受けられる。

黒崎（2014）も、スピーチコンテスト開催の趣旨の一つは国際理解の促進であると述べており（黒崎 2014p.187）、多くの地域日本語教室のスピーチ大会の目的も大きな差はなく、地域日本語教室にとってスピーチ大会は異文化交流、多文化共生のための活動として認識されていることが伺える。

2. スピーチ大会の実情と課題

前項にて金久保（2016）を引用し、日本国内のスピーチ大会は異文化交流、相互理解、多文化共生を見据えている活動であることを述べたが、多くの日本語教室が行うスピーチコンテストは実際に異文化交流や多文化共生につながると言えるであろうか。

まず金久保の分析を考察してみると、参加者（発表者）である外国人在住者にはあまりメリットがないという点を挙げている。入賞した際の賞品の存在や「純粋に話を聴衆に聞いてもらえた」（金久保 2016p.20）という点を除けば、練習の負担などのほうが大きいと論じている。ある程度の日本語運用能力を獲得しているレベルの外国人在住者であるならばまだしも、日本語能力検定試験などの合格を目指して勉学に励まなければならない状況下の学習者に発表をしてもらうにはあまりにもメリットが少ない。

またメリットを除いたとしても、教室内での「発表会」の枠を超えたスピーチコンテストの舞台に立ち、未成熟な日本語で発表するのは日本人が逆の立場でも難儀である。言語の問題もさることながら、大舞台で聴衆にスピーチをするのはかなり勇気がいるのではなかろうか。

金久保（2016p.20）が述べるように、スピーチコンテストは主催者（教師役ボランティア）にとって必要な行事であることは否めない。主

催者は積極的に学習者に発表させようとし、普段日本語を学んでいる外国人在住者は断れない関係性が構築されているのは前述した固定関係からも想像に難くはない。確固たるメリット、それも外国人在住者の今後に寄与する成果を用意する必要があるとともに、その発表を支援する手法も求められる。

また、多くのスピーチ大会は発表者の発表内容や、日本語運用力を審査し、評価し表彰する一連の行動をとっている。現状での確固たるメリットは発表者においても指導者においても良い評価を得ることになり、そのために両者は色よい発表内容を作成し、指導者は徹底した日本語の発話指導を行い、発表者はそれを必死に練習することになる。入賞するために整えられた日本語では、外国人在住者自身の言葉ではなく、発表させられているに過ぎず、それを聴講して異文化交流とするのはいささか疑問を感じずにはいられない。

さらに金久保は聴衆である市民の意識調査として、茨城県内で日本語ボランティアを行っていた男女18名にアンケートを行った。その結果では実際にコンテストに出向いた人数は8名であった。地域日本語教育に携わるボランティアの参加人数が半数程という結果は決して多いとは言えない。これが地域日本語教育に携わらない一般市民の場合は更に値は下がると予想される。

スピーチ大会は毎週、毎月といった高頻度で行われているものではなく、年に数回程度のイベントに過ぎず、聴衆である一般市民は定期的に異文化交流の機会に触れるというのは難しい。しかし、仮に回数を増やした場合、発表者である外国人学習者の負担が益々増加してしまい、とても現実的とは言えない。更にスピーチ大会は会場に訪れなければならない物理的な問題もある。日本全国の国際交流協会の多くが行うスピーチ大会の開催場所は自家用車の必要性がある場合や、公共交通機関がない場所も考えられるし、公共交通機関が充実していたとしても距離がある可能性も否めない。

しかし、地域社会におけるスピーチ大会には日本人在住者に向けた異文化情報の発信の要素や、異文化相互理解を拡充できる可能性を持っているのは紛れもない事実であろう。従って、発表者にもメリットがあり、定期的に情報発信がされ、アクセスしやすいスピーチ大会を検討する価値は大いにあり得る。

3. 異文化相互理解を目指したスピーチ

異文化相互理解を目指したスピーチ大会とは、前項での課題解決を達成するスピーチ大会に他ならない。前項での課題点とは、①発表者におけるメリット、②発表時における支援の必要性、③外国人発表者の日本語習得状況に即した発表内容、④スピーチ大会の頻度と利便性の向上、の4点である。

①の対策としては、発表者に対して発表した内容を撮影し、編集したビデオの配布を行う。地域日本語教室を訪れる外国人在住者の来日目的は様々だが、とりわけ就労や技能実習を目的とした在住者が多く、かれらは日本語能力検定試験を行う比率が比較的高いことを日本語教室での活動を通して把握している。この背景にはかれらの場合、3年前後で母国に帰国するケースが大半で、帰国後に母国で新たな職に就く者も多い。その際に日本語能力検定試験に合格している場合、それを資格として就職を有利に進めることができるからである。合格証などの公的な証書でなくとも日本での日本語学習を証明するものであれば欲しいと考えている傾向が見受けられる。そのため自身が日本語でスピーチを行っている映像を提供することで、自身の日本での活動を証明する物品として母国での次のステップにつなげるメリットを提供できると考える。

②では学習者のスピーチ発表時にプロジェクターを用いて、発表者のスピーチ内容を類推できる映像、動画、写真、音などで表示し発表者の発話内容を聴衆者に理解しやすくするものである。

斉木（2013）は、授業活動において視覚教材として「絵カード」を活用することで、スピーチ後の初級日本語学習者間の相互交渉（質疑応答）を促進できるのかを考察しており、結論として既知の情報の提示がなされれば既有する日本語力とリンクして相互交渉を円滑にする可能性に言及している（斉木 2013pp.54-55）。斉木の研究はあくまで教室内における日本語学習者（外国人）同士の相互交渉促進を考察したものではあるが、視覚情報の提示が結果に大きく影響していることは言うまでもない。

異文化相互理解を目指したスピーチではあくまで「発表者（外国人在住者）の意思・主張を聴衆者（日本人在住者・外国人在住者）に伝達すること」に主眼を置いている。したがって、日本語の正確さはあまり重視せず、また過剰な評価も行わない。その代わりに視聴覚映像を用いて意思を増幅して伝達する。③にも関わる事項であり、あくまで「自身の考えを伝えたい」とする意思を尊重することで、不足のある日本語の発話であっても、その意思を重視し、視聴覚メディアを通じて視覚にも感知させることで内容を増幅させ伝達する。その結果、純粋に主張を聴衆者に伝達するためにも発表者の日本語習得状況に応じた日本語活用のほうが望ましい。また、視聴覚メディアの投影は発表者のスピーチを視聴覚的に支援するものである。投影していることで、発表者が発話に困った際の補助ツールとしての活用を見込む。

最後に最大の課題である④であるが、これは日本語スピーチの会全体の様子をビデオなどで収録し、映像編集の後に地域在住者に配信することで、根本的な解決を図る。実際の会場の生の雰囲気を伝えることはできないが、発表者の様子やスピーチ内容は十分に伝達できると考えている。スピーチ映像を配信することで、地域在住者は好きな時に自由に視聴することが可能となり、物理的距離を感じることなく、異文化との文化的距離を縮めることに貢献できると判断している。本研究では、この一提案を実践的に検証している。

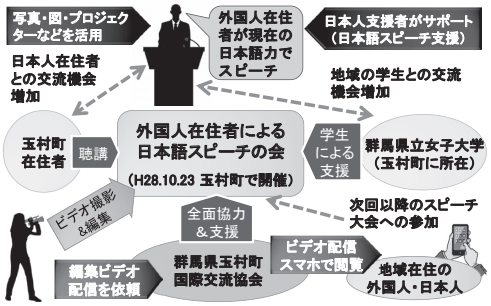


図2「外国人在住者による日本語スピーチの会」開催概要

III.　日本語でのスピーチの会の開催

1.　研究の主活動地域と団体

研究の主活動地域および団体は、現在活動を行っている群馬県佐波郡玉村町と玉村町国際交流協会とする。平成 28 年度より、玉村町国際交流協会では玉村町全体を視野にいれた情報発信や、共生にむけた社会全体での国際化（玉村町 HP「第 5 次玉村町総合計画について」（2011 p.124）を視野に入れており、行政も多文化共生を重視する動きが見受けられる。また、以前からの研究活動の主対象として、外国人在住者の中でもとりわけ労働者層を中心に考えており、その労働者層が多く集まる地域であることからも協働実践研究の場としては適していると考える。

2.　日本語でのスピーチの会の概要

図 2 に、「外国人在住者による日本語でのスピーチの会」開催概要を示している。これは、

地域社会における多文化共生を地域全体に拡充するため、玉村町在住の外国人労働者と地域在住者とで、外国人在住者による日本語スピーチの会を開催したものである。

会に参加した地域在住日本人は、外国人在住者のスピーチを聞くことでかれらについての実情を知ることができ、外国人在住者についての理解の向上が期待できる。地域在住の日本人が外国人在住者についてより多くを知ることができるようになれば、外国人在住者と日本人在住者との地域のおける交流が向上していくことが期待できる。この会が地域日本語教室以外での交流に貢献できれば、いわゆる「地域における多文化共生コミュニケーション」の形成支援活動となりえる可能性がある。そうなれば、外国人在住者と日本人在住者との交流が密になり、多くの会話がなされ、必然的に外国人在住者の日本語会話力の向上も期待できる。

3. スピーチの会開催の状況

外国人在住者による日本語スピーチの会は、玉村町国際交流協会の主催により「玉村町に住む外国人の日本語発表会」、として平成28年10月23日（日）に玉村町勤労者センター1階で開催された。発表者の人数の関係で2部構成とし、11:00 ～ 12:00に9名、13:00 ～ 14:00に8名、計17名が発表を行った。

表1に、スピーチした発表者とタイトルなどを示している。網掛けが施されているものは午前のスピーチであり、残りは午後のスピーチである。発表者は17名中9名がベトナム出身であった。ほかに、中国、イラン、フランス、フィリピン、ジャマイカと、計6か国出身者のスピーチの会となった。表の最左列は発表者の日本での在住期間を示しており、「1_02」は1年2か月を示している。最右列はスピーチ時間を示しており、「2:06」は2分6秒を示している。スピーチにおいては目標時間を5分としていたが、当日は発表者が変に意識しないように、時間は話題にあげていない。この値は、発表後に映像を編集した際に確認したものである。

図3に、スピーチの会の開催状況を示している。図3（a）は、スピーチ会場である玉村町勤労者センターの入り口付近を示したものであり、図3（b）は、入り口を入ってすぐの案内の状況を示している。図3（c）は、発表を待つ外国人発表者を示しており、好みで会場に用意されていた衣装に着替えている発表者もいた。図3(d)は、発表会場の様子を示しており、発表に先立って司会者が発表者について簡単に紹介しているシーンを示している。

図4に、プロジェクター投影によるスピーチ支援を示している。図4（a）は、冒頭の玉村町国際交流協会の会長挨拶の様子を示したものである。挨拶中はプロジェクターで「会長挨拶」であることを示すことで、遅れてきた聴講者にも会の進行状況を示すことができた。図4（b）は、外国人ながら日本で育ったことから、日本語指導のボランティアを行っている地元大学生のスピーチの状況である。スピーチの間中、タイトル、所属、氏名を示すことで、いつでも発表者について確認できるようにした。図4（c）および（d）は、ベトナム出身の女性のスピーチの様子を示したものである。それぞれ図と日本語を示しながらの場合と、写真を示しながらの場合の様子を示している。

外国人在住者による日本語でのスピーチの会の開催における特徴の一つは、映像情報を活用してスピーチの理解支援を行ったことにある。また、図3（d）に示しているように、スピーチに先立ち司会者が簡単に発表者について説明を行うことで、聴講者への理解を高めようと努めている。具体的には、ベトナム人にとって「つ」は「ちゅ」となる傾向があると説明を行っている。これは外国人在住者理解のための重要なポイントであり、同時に聴講者のスピー

表1　スピーチした発表者とタイトルなど

在住	出身国	性	スピーチタイトル	時間
1_02	中国	女	私の将来の夢	2:06
1_05	ベトナム	男	日本語はとても優しい言葉	4:33
2_00	ベトナム	男	日本が好きになりました	2.17
1_05	ベトナム	女	日本語の勉強と将来の夢	3:15
0_10	ベトナム	男	日本とベトナムの違い	3:36
6_00	イラン	女	日本に住んでみて	0.54
2_00	ベトナム	男	僕の日本での２年間	2:35
1_05	ベトナム	男	日本語は難しい	2:17
ー	中国	女	日本と中国の教育事情	2:36
2_02	ベトナム	男	日本に来て感じたことあれこれ	4:52
0_09	フランス	男	奥さんが大好きです！	2:37
0_10	ベトナム	男	日本語検定３級を目指して	2:41
0_02	フィリピン	女	今年の９月に来たばっかり！	2:38
0_07	ジャマイカ	女	日本に住んでみて	6:39
0_02	フィリピン	男	今年の９月12日に来たばかり！	1:36
2_10	ベトナム	男	群大病院に入院して	2:51

(a)スピーチ会場　(b)入り口の案内

(c)外国人発表者　(d)会場の様子

図3　スピーチの会の開催状況

(a)協会長の挨拶　(b)ボランティアの言葉

(c)スピーチ支援（図）　(d)スピーチ支援（写真）

図4　プロジェクター投影によるスピーチ支援

チ理解にとっても重要な支援となる。

会場には椅子だけでなくテーブルを配置し、それぞれの席にアンケート用紙と鉛筆を配布した。落ち着いて聴講してもらうためでもあるが、アンケートは会が終わってから記入してもらうのでは、回答してもらえない場合があるため、本音での多く回答を得るために配慮したものである。さらに、会長の終了挨拶では、「玉村町と地域住民はあなたたち外国人の居住を歓迎している。どんなことでもいいから積極的に町の住人とコミュニケーションを持ってほしい」といった趣旨を述べてもらい、日本人在住者にも積極的な声かけ支援をお願いした。

4. 聴講者によるアンケート結果と評価

日本語によるスピーチの会開催の有効性の評価を行うために、スピーチの会に出席した地域在住の日本人に対してアンケート調査を実施した。表２に、アンケート回答者の状況（聴講者）示している。回答者の男女比率は男性：女性≒1：2、住所としては玉村町が多かったが、約44％は他の地区からの参加であった。職業や年代から判断して、さまざまな年齢・立場の方の参加があったと推定されるが、半数が50代以降の方という状況であった。

表３に、アンケート回答結果（聴講者）を示している。これは、表に示した質問事項に対して５段階評価で回答してもらった結果の集計表を示しており、網掛けが施されているものは、回答結果で最大数のものを示している。一つの質問項目だけを除いて、残りはすべて５の評価が最大数となっている。結果を大きくまとめると、①スピーチと一緒に映像を投影することで、発表内容が理解しやすくなる、②スピーチ内容が理解できたことで、外国人在住者の日本語力や生活環境などを理解することができ、日本人在住者との関係性を良くできると判断されている、③発表者や、発表者以外の外国人在住者にも町中での声かけを考える在住者が多いと判断される、④発表会に参加してよかったと考える人は、評価４の人も含めると86％（31名）にもなり、今後の開催が期待されている、の４つのことが言えると評価された。なお、「スマホやパソコンで外国人在住者のスピーチなどを見たいと思いますか」の質問に対してのみ、5

表2　アンケート回答者の状況（聴講者）

性別	住所	職業	年代
男性　12	玉村町 19	主婦(夫) 3	10 代　7
女性　23	その他 16	会社員　6	20 代　9
無回答　1	無回答　1	自営業　2	30 代　1
		公務員　5	40 代　1
		学生　4	50 代　7
回答総数 36		無職　11	60 代　7
		その他　5	70 代　4

表3　アンケート回答結果（聴講者）

	思う・良い⇔悪い・思わない				
アンケート質問事項	5	4	3	2	1
発表者の発表内容はよく聞き取れましたか	19	13	3	0	0
発表者の発表内容は理解できましたか	20	12	2	0	0
発表者や他の外国人がどのような生活を送っているか興味・関心を持ちましたか	19	13	3	0	0
発表内容と関連する映像を投影したことが発表内容の理解につながりましたか	21	6	8	0	0
投影した映像の見やすさはいかがでしたか	16	8	9	2	0
意思疎通の際に映像を使用することは理解向上につながると思いますか	23	10	2	0	0
映像で外国人の生活環境を知ることが、日本人との関係性を良くすると思いますか	19	9	5	0	0
スマホやパソコンで外国人在住者のスピーチなどを見たいと思いますか	8	11	11	2	1
今後、発表者と町中で会った時に、声をかけてみようと思いますか	14	8	12	1	0
発表者以外の外国人在住者と町中で会ったとき、声をかけてみようと思いますか	11	9	11	2	0
日本語発表会が外国人在住者のことを理解することにつながると思いますか	21	11	1	0	0
発表を聞く前後で、外国人に対する意識や考えに変化はありましたか	12	11	10	0	0
本日の日本語発表会に参加してよかったと思いましたか	25	6	2	0	0
このような発表会やイベントに、また参加したいと思いましたか	22	9	2	0	0
玉村町国際交流協会の活動に興味・関心をお持ちいただけましたか	18	12	3	0	0

注：網掛け箇所は最大数を示している。

の評価が最大数となっていないが、このことは出席者の年齢が高いことから、日頃からスマートフォンやパソコンを使用していないことが推定され、そのことが影響しているのではないかと推測される。

アンケートでは自由記入欄も設けて、どんなことでも気付いた点について記述してもらった。表４に、記述による回答結果（聴講者）を示している。日本での生活の状況を知ったことで、外国人在住者に声をかけてみようと思うようになったことや、思った以上の日本語スピーチ力に感心したり、想像以上にたくさんの若者が日本で生活していることへの驚きなども述べられている。外国人在住者による日本語スピーチの会を開催したことは、日本人在住者に外国人在住者についての理解につながる情報を伝達できたと判断されるだけでなく、外国人在住者への声掛け支援やサポートすべきとの気持ちを芽生えさせる効果が十分にあったと判断される。

表4　記述による回答結果（聴講者）

どのような点が「外国人在住者に声をかけてみよう」と思うきっかけになりましたか。
○日本語学習を通じて、日本を理解してもらえると感じたから。 ○皆さんが、懸命に生活していることを知り、とても心を打たれました。不安をかかえながら生活しているのだと思ったため。 ○何か出来ることがあればサポートすべきだと思ったため。
今回の発表会や、外国人在住者についてのお考えなどを自由にお書きください。
○短期間で仕事をしながらも難しい日本語をこれほど話すことができることがすばらしい。 ○こんなに多くの若い人が来日しているとは思っていなかった。もう少し、中年に近い20代後半～30代の人々と思っていました。 ○言葉が分らない国での生活は大変だと思うし、ホームシックになるだろうと思うけど日本の良さも理解して、頑張って欲しいです。

Ⅳ. 映像媒体の積極的活用について

1. 映像媒体活用の背景

日本語教育の場における映像利用の先行研究は、Gehatz・保坂（2013）、谷口（2012a・2012b）、高橋（2006）、佐藤（1997）など多数存在している。

Gehatz・保坂（2013）は映像作品が言語学習のリソースとして一定の評価を得ている一方、教室内の学習素材としては活用が不十分であると述べ、教師と学習者の学習観をとらえな

おすことで映像作品の学習活用の可能性を論じている。

谷口（2012a・2012b）は、視聴覚メディアを利用して効果的な授業を行うために、学習者が視聴覚メディアにどのように触れ、また日本語学習に役立っているのかを明らかにし、一方で教師が映像作品を日本語教育の学習リソースとして扱っているかの実態を調査することで、映像作品を用いることを教師がどのように捉えているのか、教師の認識や教師の信念を明らかにした。

高橋（2006）は、テレビドラマの聴解授業を行うことで、話す、書く、読む、聞く、の４技能養成が行えると考え、多面的能力養成を目指した授業活動の試みを述べている。

このように、視聴覚メディアの活用に関する研究は、主に日本語教育環境での活用とその効果について述べたものや、視聴覚教材に対しての教師と学習者の意識について言及したものとなっている。外国人と日本人を取り巻く環境において、視聴覚メディアの活用は学校型日本語教育の枠内での利用しか考察が盛んではないと見受けられるが、言語によるコミュニケーションを補完することが可能であることから、異文化交流での積極的活用は大いに検討されるべきと判断される。

佐藤（1997）も、言語教育からの視点や外国人の日本文化適応の視点から映像教材の利用について考察を行っている。映像教材は文字教材に対して、①視覚・聴覚情報を伴うため、語学力が不十分での内容把握が容易である、②短時間で大量の情報を伝達できる、③臨場感があり、登場人物の立場から物事を考えることが容易になりやすい、④一つの場面を視覚イメージとして共有でき、共通の土台に立っての考察が可能、と大きく４つの利点を述べている。また、❶情報が過剰であるため情報の選択に迫られる、❷教材の作成や提示の仕方に注意しないと違った情報を受信してしまう、❸文章では描写が可能な人間の心の動きが表現しにくい、❹話者や視聴者を不快にする可能性がある、❺テレビなどから録画した映像は著作権の関係から配布できない、などの欠点も指摘している。

本研究の概要は、外国人在住者によるスピーチの会を開催し、その時の映像を、日本人在住者と外国人在住者の異文化交流形成のツールとして活用しようとするものである。この映像を活用する手法の特徴としては以下があげられる。

外国人在住者のスピーチの状況のみを撮影編集するために、❶の「情報が過剰となる」ことは回避できる。また、発表者に許可を得ることで、❺の「著作権問題」も回避できる。ビデオ編集はスピーチの開始から終わりまでのみに対して行うこととし、すべてのスピーチに対し、日本語の字幕を入れる。また、配信はビデオ上映会での再生と、基本的に、映像ファイルを希望する外国人在住者及び日本人在住者のみに貸与する予定である。❷の「教材の作成や提示の仕方」も単一化を考えており問題はないと判断できる。次に心の動き、特にホームシックについてのスピーチが考えられるが、言葉での表現となるので、❸の「心の動きが表現しにくい」についても回避できると判断している。最後に、❹の「話者や視聴者を不快にする」の問題であるが、ビデオに視聴者の顔が映っている場合、配布の許可を得るのではなく、横顔画像であってもモザイクを入れることとしている。編集したビデオは、最初に、スピーチした外国人在住者と国際交流協会関係者にだけ視聴してもらい、スピーチした本人が承諾した場合のみ、配布やビデオ上映会での再生を行うものとしていることから、この問題においても回避できると判断している。

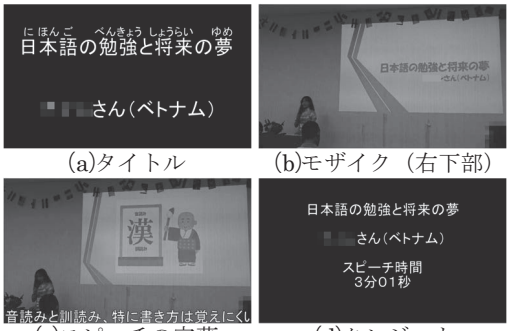
2. スピーチビデオの編集

図5に、配信を前提とした映像編集を示している。図5（a）および（d）は、それぞれタイトルとクレジットを示しており、ビデオには開催の日時や場所などの情報も含ませている。図5（b）は映り込んだ聴講者の横顔に施したモザイク処理の状況であり、図5（c）は、映像下部にスピーチ内容について日本語の字幕を表示させたものである。

外国人在住者は、母国との連絡の関係で、ほぼ全員がスマートフォンを所持していると推定される。スマートフォンであれば機種に関係なく、MP4のファイル形式の映像が再生可能とのことから、すべてMP4形式で編集している。また、スマートフォンのデータ保存容量を圧迫しないように、854 × 480ドット(WVGA)の解像度で編集している。筆者の所有するスマートフォンに、発表者17名と外国人アシスタント1名の計18名分のスピーチファイルを保存しているが、データ保存容量を圧迫することなく、また、問題なく再生できることを確認した。

3. 編集ビデオへのアンケート結果と評価

スピーチビデオの編集後、ビデオ上映会を玉村町で開催した。参加者はスピーチしなかった者を含む外国人学習者11名と日本語教室のスタッフ13名で、上映会後にアンケートによる評価を行った。



(a)タイトル　(b)モザイク（右下部）
(c)スピーチの字幕　(d)クレジット

図5　配信を前提とした映像編集

表5に、スピーチビデオ視聴後のアンケート回答結果を示している。これはスピーチしなかった者を含む外国人在住者11名の回答結果を示したもので、スタッフ13名の回答結果もほぼ同様の傾向にあったことから、外国人在住者の回答のみを示している。回答結果の表示については表3と同様である。結果を大きくまとめると、①ビデオの音はよく聞こえ、映像があると話が分かりやすい、②日本語発表会を継続して行うと、外国人・日本人在住者のコミュニケーションが増えると思う、③発表会や上映会にまた来たい、④日本語発表会の映像をスマホなどで見ると、日本語が上手になると思う、⑤今日の上映会に来てよかった、自分も（また）発表してみたい、であり、日本語スピーチの会の開催や映像・ビデオを支援ツールとすることは、外国人在住者に受け入れられていると判断された。日本語スピーチの会を開催するだけでなく、ビデオ映像による情報発信を効果的に行うことができれば、地域在住の外国人と日本人とのコミュニケーションが増大できる可能性を確認できた。また、コメントにより、日本語字幕の表示方法やふりがなの追加表示などの希望も確認できた。

V. まとめと今後の研究活動

地域社会における多文化共生を地域全体に拡充することを目的として、玉村町国際交流協会の全面的な協力を得て、玉村町在住の外国人労働者と地域日本人在住者による「外国人在住者による日本語でのスピーチの会」を開催した。外国人在住者にとって、日本語習得を「絶対的なもので必須のファーストステップ」と考えずに、外国人在住者と日本人在住者との相互理解から地域社会における多文化共生を目指そうとするもので、スピーチの会の開催は、地域に暮らす外国人と日本人が、まず互いに理解し合おうとする活動を実践しようとしたものである。

表5　ビデオ視聴後のアンケート回答結果

外国人在住者（11 名）へのアンケート	良い ⟺ 悪い				
アンケート質問事項	5	4	3	2	1
ビデオの音はよく聞こえましたか？	8	2	1	0	0
なににについて話しているかわかりましたか？	5	5	1	0	0
映像があると、話が分かりやすかったですか？	10	0	0	0	0
ビデオは見やすかったですか？	10	0	1	0	0
日本人と話すときに、映像や写真があると話しやすいですか？	9	1	1	0	0
日本語発表会が玉村町の人に自分たちのことを分かってもらえると思いましたか？	7	2	0	1	1
まだ教室に来ていない友達に、日本語発表会や上映会に誘いたいですか？	7	2	1	1	0
日本語発表会や上映会をすると、玉村町が国際的になると思いますか？	7	2	1	1	0
日本語発表会を継続して行うと、外国人・日本人のコミュニケーションが増えると思いますか？	9	0	2	0	0
今後、発表会や上映会にまた来たいと思いましたか？	10	1	0	0	0
スマホやパソコンで発表会の映像を見たいと思いましたか？	7	2	1	0	1
スマホやパソコンなどで日本語の勉強をしたいと思いましたか？	10	1	0	0	0
日本語発表会の映像をスマホなどで見ると、日本語が上手になると思いますか？	8	2	1	0	0
今日の上映会に来て、よかったと思いますか？	11	0	0	0	0
自分も（また）発表してみたいと思いましたか？	8	2	0	0	1

注：網掛け箇所は最大数を示している。

実施した日本語スピーチの会では、6 か国 17 名の外国人在住者がスピーチを行ったが、司会者が発表者について簡単な紹介を行うことや、スピーチの際にプロジェクターでその内容をイメージした映像を投影することなどにより、日本語力が不十分な外国人在住者であってもコミュニケーションが成立できることが確認できた。アンケート調査の結果、外国人在住者の日本における不安や寂しさを抱えながらの生活状況などを日本人在住者が知ることができたことから、外国人在住者への声掛けや積極的な支援を考えるようになったことも確認できた。

今回実施したような外国人在住者による日本語スピーチの会を継続して開催できれば、外国人在住者の日本語能力の向上が期待できるとともに、国内での国際交流を深め、国籍や文化の違いを越えた相互理解を向上させ、多文化共生の社会づくりに貢献できると考えられる。しかしながら、回数を増やそうとした場合、開催の手間や費用だけでなく、外国人発表者やその指導者の負担が大幅に増加することとなり、とても現実的とは言えない。また、スピーチ大会で外国人在住者のスピーチを聞こうとした場合、開催時間帯に開催会場に出向く必要があり、希望する誰もがスピーチを聞けるという訳にはいかない。

このような背景もあり、実施した日本語スピーチの会でのスピーチは、地域の日本人在住者および外国人在住者への配信を目的として、映像編集を行っている。編集後、スピーチしなかった者を含む外国人学習者と日本語教室のスタッフを対象に上映会を行い、アンケートによる評価を実施したところ、日本語発表会の映像をスマートフォンなどで見ると日本語が上手になると思われていることや、発表会や上映会にまた来たい、自分も（また）発表してみたい、との希望があることが確認できた。

今後、編集した映像は、玉村町国際交流協会を介して希望者に配信していく予定である。個人名や勤務先名などの情報が含まれることから、インターネットでの配信は考えていない。当初は外国人在住者が所有しているスマートフォンによる再生を念頭に準備を進めたが、高齢の日本人在住者への情報発信にも配慮して、ビデオレコーダーで再生できる DVD での配信の準備も開始した。さらに、映像再生装置ごとの貸し出しの検討も開始しており、国籍や文化の違いを越えた、地域における相互理解の向上を目指していく。

また、今回編集したスピーチ映像は玉村町地区だけでなく、近隣地域の国際交流協会へも働きかけて複合地域への情報発信を行う予定である。その後、この活動に強い関心をもった協会に対しては、その地区で実際にスピーチ大会を開催できるよう直接支援を行っていく予定であ

る。他の国際交流協会における活動内容を、今度は玉村町国際交流協会に発信し、各地域内に異文化交流の意識の根を生やし、地域同士に根を絡み合わせて、国内での異文化交流の意識を広めて行こうとするものである。

また、今回の実践的検証活動の結果を基に、より効果的なビデオ編集を検討している。当面、日本語字幕にふりがなを振るなど表示形態の改良を行う予定であるが、日本語学習支援としての活用も念頭に、発表者の母国語の字幕映像版の作成の検討も行う予定である。スピーチビデオを活用する一連の活動によって、徐々にではあるが一歩ずつ確実に、地域を広げた多文化共生を目指していく予定である。

謝辞

本実践活動では、玉村町国際交流協会、群馬県立女子大学国際交流倶楽部、外国人発表者、玉村町職員をはじめ、多くの方々にご協力頂いたことに、この場を借りて御礼申し上げます。

参考文献

池上摩希子（2007）「「地域日本語教育」という課題－理念から内容と方法へ向けて－」『早稲田大学日本語教育研究センター紀要』第20号, 105-117.

斉木ゆかり（2013）「視覚教材による相互交渉の促進：初級会話授業での試み」『日本語教育方法研究会誌』第20号2巻,54-55.

金久保紀子（2016）「日本語スピーチコンテスト実態と課題」『筑波学院大学紀要』第11集,13-23.

黒崎佐仁子（2014）「日本語学習者は日本語スピーチをどのように評価するのか」『聖学院大学論叢』第27巻第1号,187-196.

Gehrtz三隅友子・保坂敏子（2013）「映像作品を利用した構成主義に基づく授業デザイン」『徳島大学国際センター紀要・年報』2013年号,1-9.

佐藤勢紀子（1997）「異文化教育における映像教材の利用法: 外国人の日本文化適応のために」『放送教育開発センター研究紀要』第14号, 1-20.

高橋純子（2006）「テレビドラマ聴解の授業報告」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第21号,77-96.

高村めぐみ（2014）「初級日本語学習者へのスピーチ指導：ポーズ指の効果について」『桜美林言語教育論叢』第10号,11-24.

谷口美穂（2012a）「日本語学習者の視聴覚メディア使用：インタビューからみえた教室外における自律学習の実態」『言語教育研究』第2号,65-74.

谷口美穂（2012b）「映像作品を用いた日本語教育： 教師へのインタビューから見えた授業の実態と課題」『桜美林大学言語教育論叢』第8号,143-158.

米勢治子（2006）「「地域日本語教室」の現状と相互学習の可能性：愛知県の活動を通して見えてきたこと」『人間文化研究』第6号, 105-119.

米勢治子（2010）「地域日本語教育における人材育成」『日本語教育』第144号,61-72.

米勢治子（2011）「CIRAC調査研究レポート『生活者としての外国人』の日本語学習支援」『中部圏研究』第176号,47-53.

米勢治子（2016）「新しい日本語学習支援の方法：学習者と一緒に活動するために」『群馬県立女子大学地域日本語教育センター主催 平成28年度 地域日本語教育講演会』配布資料

「第5次玉村町総合計画について」（2011）, https://www.town.tamamura.lg.jp/soshiki/2/keikaku-index.html　2016-12-24アクセス